慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向： 後項動詞を指標として
Sub Title	
Author	村田, 年(Murata, Minori)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2013
Jtitle	日本語と日本語教育 No.41 (2013. 3) ,p.67- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-00000041-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』41：67–95（2013.3）

社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向

—後項動詞を指標として—

村　田　　年

1. はじめに

村田（2008）において，複合動詞の後項動詞が文章のジャンル判別のために有効な指標となり得ることが示唆されたため，村田・山崎（2012）では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて，自然科学系書籍に現れた後項動詞を対象に調査を行った。本稿では引き続き，社会科学系書籍を対象として調査を行う。

2. 研究目的

複合動詞の後項動詞が文章のジャンル判別の指標となり得るかどうかを実証的に分析することを目的として，本研究では社会科学ジャンルの文章における複合動詞の後項動詞の使用傾向を明らかにする。資料としては『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の書籍コーパス内の「社会科学」の文章を用いる。

3. 調査対象

3–1　調査対象としての後項動詞

調査対象は，姫野（1999）を参考に選択した 22 の後項動詞である [1)]。以下に 22 後項動詞を挙げる。

〈22 後項動詞〉（アイウエオ順）

あう，あがる，あげる，あわせる，いる，いれる，かかる，かける，きる，こむ，こめる，だす，たつ，たてる，つく，つける，でる，とおす，なおす，なおる，ぬく，まくる

3-2　調査対象としての文章資料

調査に用いた資料は，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）の書籍データである。BCCWJ のデータ量は表 1 のとおりである。書籍内は 11 に分類され，その内訳は「総記，哲学，歴史，社会科学，自然科学，技術・工学，産業，芸術・美術，言語，文学，分類なし」である。各分類の語数は表 2 に示す。なお，この調査で使用した書籍の部分についての詳細は山崎（2009）を参照されたい。

表 1　BCCWJ のデータ量

サブコーパス	ジャンル	サンプル数	語数（万）
出版サブコーパス	書籍	10,105	2,849
	雑誌	1,989	443
	新聞	1,479	138
図書館サブコーパス	書籍	10,461	3,011
	白書	1,500	488
	教科書	412	93
	広報紙	354	400
特定目的サブコーパス	ベストセラー	1,377	371
	Yahoo! 知恵袋	91,445	1,028
	Yahoo! ブログ	52,680	1,027
	韻文	253	23
	法律	346	100
	国会会議録	159	510
合計		172,560	10,481

表 2　書籍 NDC 別の語数

書籍の NDC 別内訳	語数
0　総記	642,351
1　哲学	1,799,241
2　歴史	2,674,253
3　社会科学	6,854,656
4　自然科学	1,631,154
5　技術・工学	1,363,963
6　産業	878,954
7　芸術・美術	1,311,554
8　言語	492,255
9　文学	11,267,012
分類なし	478,536
合計	29,393,929

（注）「語数」は，コーパスの構築に際して使われている解析の言語単位である「短単位」で数えたもの。空白，補助記号（句読点など），記号（A, B, C, ア，イ，ウなど）を含まない数である。

4.　調査方法

4-1　複合動詞の抽出方法

複合動詞の抽出方法は村田・山崎（2012）と同様である [2)]。

4-2　調査結果の整理―複合動詞の選択方法―

4-2-1　整理の方法

用字の異なりをはじめ，前項動詞の音便形の存在など，様々な問題があるため，本調査では以下の方法で見出し語としての複合動詞を選択した。

(a)　各後項動詞の用字の差異（例：あう／合う／会う）ならびに動詞の活用変化の形（例：あわな，あいます，あう，あえば，あおう，あって，あった等）は同定して同じ動詞項目として扱った。

(b)　複合動詞の前項動詞については，同音で用字が異なるものはコーパスの語彙素項目の用字に合わせて整理した。例えば，「書き出す」は「掻き出す」とは別の見出し語になっているが，「探し出す」は「捜し出す」として一つの見出し語となっている。このように本調査の結果としてまとめた表内の複合動詞の代表見出し項目については，異なる用字の可能性も含まれている。

(c)　本調査では複合動詞の動詞としての用法を対象とするので，語彙素項目が動詞でも，実際には名詞，副詞として用いられているものは使用頻度からは外した。例えば，「届出印」という語の「届出」，「思い切って輸入する」の「思い切って」のような用法である。

(d)　前項動詞が音便形になっている語については，斎藤（1992）が指摘するように，前項動詞が音便形になる語が必ずしも非音便形を持つわけではなく，音便形と非音便形の意味関係も同じとは限らない。例えば，辞書[3]で「ぶつける」は「ぶっつけるの転」という説明があるが，実際には各語の意味するところは同一とは言えない。このように複雑な意味関係を持つため，別の見出し語として立てた。一方，前回の自然科学系ジャンルの調査では「くっ付く」は「食い付く」とは意味的に遠く，辞書でも五段動詞の扱いだったことから，複合動詞として扱わなかったが，本調査でも使用頻度が高かったことから，「くっ付く」，「食い付く」を並べて見出し語として立てることに変更した。

(e)　「打ち込める」のようにその意味から考えて対応する「打ち込む」の可能形と考えられるものがあるが，本調査では出現形のままで数えた[4]。

(f)　動詞が三つ続く場合は最後尾の動詞を後項動詞とした。

4-2-2　自然科学系ジャンル（含技術・工学）の調査結果の改訂

4-2-1 節（d），(e）で述べたように，村田・山崎（2012）と整理の方法を一部変更したため，本調査との比較対象のために，前回の自然科学系ジャンル（含技術・工学）に関する調査結果を集計し直した。これにより，集計結果が大きく変わったのは「込む」と「込める」である。次が「つく」と「つけ

る」で，「あう」，「あわせる」は数語のみの差異であった。他の 16 の後項動詞については変更はなかった。この改訂結果は「5. 調査結果」で示す。

5. 調 査 結 果

5-1 結果の概要

書籍コーパスの社会科学ジャンルにおける 22 の後項動詞による複合動詞の総延べ語数は 37620 語であった。各後項動詞の使用頻度（延べ語数）は表 3-1 のとおりである。表 3-1 で使用頻度が圧倒的に高いのは，5500 語を超える「だす」「こむ」の 2 動詞で，これらを後項動詞とする複合動詞は，本調査における全複合動詞の総延べ語数の約 34％を占めている。

次に造語力の高い 3000 語台の動詞は，「あう」「あげる」「つける」の 3 動詞で，これらの語から成る複合動詞を上記の結果と合わせれば，全複合動詞の約 61％を占めることになる。さらに，1000～2000 語台の「かける」「いれる」「つく」「あがる」「たてる」「きる」までの 11 動詞による複合動詞を合わせれば全体の約 87％となる。つまり，社会科学ジャンルの書籍に出現する 22 の後項動詞のいずれかを含む合計 37620 語の複合動詞の中で，使用頻度上位 11 の後項動詞から成る複合動詞でその約 9 割がカバーされているということである。

ここで，自然科学系ジャンル（含技術・工学）の改訂版の調査結果と比較してみよう。22 の後項動詞による複合動詞の総延べ語数は 26104 語である。各後項動詞の延べ語数は表 4-1 のとおりである。村田・山崎（2012）でも指摘したように，使用頻度である延べ語数が圧倒的に多いのは 4500 語を超える「だす」「こむ」の 2 動詞で，これらを後項動詞とする複合動詞は全延べ語数の約 35％である。次に造語力の高い「つける」「あげる」「あう」の 3 動詞を合わせると約 61％を占めることになり，使用頻度上位 11 の後項動詞から成る複合動詞を合わせれば全体の約 88％となっている。つまり，社会科学ジャンルも自然科学系ジャンル（含技術・工学）も，22

表 3-1　22 後項動詞使用頻度順（社会科学）

	後項動詞	延べ語数
1	だす	7026
2	こむ	5631
3	あう	3839
4	あげる	3499
5	つける	3056
6	かける	2304
7	いれる	2145
8	つく	1953
9	あがる	1271
10	たてる	1077
11	きる	1003
12	なおす	961
13	たつ	751
14	あわせる	719
15	でる	555
16	かかる	500
17	ぬく	409
18	こめる	361
19	いる	239
20	とおす	120
21	なおる	101
22	まくる	100
	合計	37620

表 4-1　22 後項動詞使用頻度順（自然科学改訂版）

	後項動詞	延べ語数
1	だす	4683
2	こむ	4526
3	つける	2550
4	あげる	2238
5	あう	1905
6	つく	1385
7	かける	1321
8	あわせる	1276
9	あがる	1249
10	いれる	1216
11	たつ	665
12	きる	613
13	なおす	572
14	たてる	560
15	でる	386
16	かかる	272
17	ぬく	224
18	こめる	189
19	いる	125
20	まくる	58
21	とおす	53
22	なおる	38
	合計	26104

表 3-2　22 後項動詞の異なり語頻度順（社会科学）

	後項動詞	異なり語数
1	あう	355
2	だす	280
3	こむ	176
4	きる	120
5	なおす	113
6	あげる	108
7	かける	100
8	つける	94
9	つく	61
10	あがる	57
11	あわせる	50
12	まくる	49
13	かかる	46
14	たてる	42
15	こめる	40
16	ぬく	39
17	でる	38
18	いれる	37
19	とおす	27
20	たつ	25
21	いる	22
22	なおる	5
	合計	1884

表 4-2　22 後項動詞の異なり語頻度順（自然科学改訂版）

	後項動詞	異なり語数
1	あう	237
2	だす	217
3	こむ	179
4	なおす	128
5	あげる	103
6	きる	102
7	つける	94
8	かける	94
9	あがる	57
10	つく	55
11	いれる	52
12	あわせる	43
13	たてる	38
14	でる	38
15	まくる	38
16	かかる	35
17	こめる	34
18	ぬく	28
19	いる	25
20	たつ	21
21	とおす	13
22	なおる	4
	合計	1635

後項動詞の半数に当たる 11 の後項動詞から成る複合動詞で，その約 9 割がカバーされているということがわかった。

両ジャンルにおける上位 11 後項動詞については，「だす」「こむ」「つける」「あげる」「あう」「かける」「いれる」「つく」「あがる」の 9 語が共通で，残りの 2 語が異なる。社会科学ジャンルでは「たてる」「きる」が入り，自然科学系ジャンル（含技術・工学）では「あわせる」「たつ」が入っている。

各後項動詞の延べ語数の順位を見ると，社会科学ジャンルも自然科学系ジャンル（含技術・工学）も全体的に出現の傾向が似ていることがわかる。22 語を大きく三つ（上位 5 語，中位 9 語，下位 8 語）に分けて見てみる。上位 5 語は，6 位以下の語に比べて，延べ語数も目立って多いと言える。最多の「だす」に「こむ」が続き，上位 3 位から 5 位も順位が「あう」と「つける」が入れ替わるものの，5 語とも二つのジャンルに共通している。中位の 6 位から 14 位の 9 語も両ジャンルに共通している。「あわせる」と「たてる」の順位の差異が目を引く以外は，「いれる」「つく」「あがる」「たてる」「きる」「なおす」「たつ」の 7 語は両ジャンルで近い順位にある。下位 15 位から 22 位の 8 語も同様で，「まくる」の順位が若干異なるものの，それ以外の 7 語「でる」「かかる」「ぬく」「こめる」「いる」「とおす」「なおる」は両ジャンルで同じ順位を占めているのがわかる。

このように 22 の後項動詞の延べ語数とその使用傾向を見ると，社会科学系と自然科学系というジャンルの違いはあっても，各後項動詞の造語力や使用の範囲によって，その使用には似た傾向があると言えそうである。なお，表 2 に示した書籍内のジャンル別語数に占める割合を比較すると，22 の後項動詞からなる複合動詞は，社会科学ジャンルでは全語数の約 0.6％（37620/6854656＝0.0055），自然科学系ジャンル（含技術・工学）では約 0.8％（26104/2995117＝0.0077）となっていて，全語数に占める複合動詞の使用率は低いものであることがわかる。

次に異なり語数について見てみる。22 後項動詞の異なり語数について

は，社会科学ジャンルを表 3−2 として，自然科学系ジャンル（含技術・工学）改訂版を表 4−2 として示す[5)]。異なり語数 100 語前後までの上位 8 語を見ると，両ジャンルとも「あう」が最多で，「だす」，「こむ」がそれに続き，この 3 語の異なり語数の多さが目を引く。それ以降は 8 位まで二つのジャンルで順位が前後するものの，両ジャンルとも「きる」「なおす」「あげる」「かける」「つける」が来ている。9 位以降は，異なり語数が徐々に落ちていくが，僅差だと言えよう。特徴的なのは最下位の「なおる」で，異なり語数が極めて少ない。

後項動詞の使用頻度が高ければ，結合する前項動詞の種類も多いというわけではないことは，すでに前回の自然科学系ジャンル（含技術・工学）における調査でも触れた。今回の社会科学ジャンルの調査でも同様の結果となった。延べ語数 3839 語の「あう」の異なり語数は 355 語で，延べ語数 7026 語の「だす」，5631 語の「こむ」の各異なり語数 280 語，176 語を大きく上回っている。また延べ語数が同じ程度の 751 語「たつ」と 719 語の「あわせる」はそれぞれ異なり語数が 25 語と 50 語というように 2 倍の差があり，延べ語数が 101 語の「なおる」と 100 語の「まくる」も異なり語数はそれぞれ 5 語と 49 語というように 10 倍近くの差があり，結合する前項動詞のバリエーションは後項動詞によって大きな差があることがわかる。

次に，22 の後項動詞ごとに複合動詞の使用傾向を具体的に見て行く。ここでは対象となる複合動詞が 37620 語と多いため，便宜上延べ語数が 30 回以上の語だけを表 5 に頻度順に挙げる。なお，自然科学系ジャンル（含技術・工学）の改訂調査結果も表 6 に揚げる。

表 5 では，各見出し後項動詞の横に，その後項動詞から成る複合動詞の総数に当たる延べ語数と異なり語数を（3839＊355）のように記してある。表 5 を見るとほとんどの後項動詞で，使用頻度が非常に高い複合動詞は上位の限られた数の語であることに気づく。これは自然科学系ジャンル（含技術・工学）の調査結果と同様である。これら上位の複合動詞の使用が当

表 5　22 後項動詞による使用頻度 30 回以上の複合動詞（社会科学）

	あう（3839＊355）	
1	出会う	466
2	話し合う	458
3	付き合う	290
4	向き合う	196
5	見合う	187
6	知り合う	111
7	立ち会う	80
8	語り合う	78
9	絡み合う	58
10	助け合う	58
11	分かち合う	58
12	重なり合う	57
13	出し合う	55
14	向かい合う	51
15	触れ合う	47
16	協力し合う	46
17	取り合う	46
18	競い合う	44
19	支え合う	41
20	分け合う	39
21	似合う	38
22	噛み合う	32
23	確認し合う	30
	あげる（3499＊108）	
1	取り上げる	1024
2	引き上げる	386
3	作り上げる	376
4	申し上げる	246
5	積み上げる	101
6	立ち上げる	98
7	仕上げる	88
8	持ち上げる	76
9	築き上げる	73
10	盛り上げる	61
11	読み上げる	60
12	見上げる	49
13	打ち上げる	45
14	押し上げる	45
15	書き上げる	36
16	育て上げる	35

17	差し上げる	34
18	纏め上げる	34
19	吸い上げる	32
20	切り上げる	31
	あがる（1271＊57）	
1	出来上がる	321
2	立ち上がる	195
3	浮かび上がる	136
4	盛り上がる	101
5	膨れ上がる	59
6	沸き上がる	41
7	持ち上がる	34
8	起き上がる	33
9	跳ね上がる	33
10	燃え上がる	33
	あわせる（1276＊43）	
1	組み合わせる	207
2	問い合わせる	77
3	持ち合わせる	67
4	照らし合わせる	43
5	重ね合わせる	32
6	居合わせる	30
	いる（239＊22）	
1	立ち入る	96
	いれる（2145＊37）	
1	受け入れる	998
2	取り入れる	490
3	組み入れる	120
4	仕入れる	88
5	申し入れる	60
6	借り入れる	43
7	踏み入れる	43
8	聞き入れる	38
9	迎え入れる	35
	かかる（500＊46）	
1	引っ掛かる	97
2	取り掛かる	95
3	差し掛かる	58
4	通り掛かる	39
5	伸し掛かる	38
6	襲い掛かる	34

	かける（2304＊100）	
1	出掛ける	527
2	見掛ける	211
3	呼び掛ける	199
4	働き掛ける	187
5	話し掛ける	156
6	仕掛ける	137
7	追い掛ける	118
8	投げ掛ける	115
9	語り掛ける	84
10	問い掛ける	82
11	押し掛ける	56
12	引っ掛ける	43
13	持ち掛ける	41
14	見せ掛ける	38
15	詰め掛ける	31
	きる（1003＊120）	
1	踏み切る	125
2	言い切る	101
3	乗り切る	77
4	断ち切る	63
5	思い切る	62
6	打ち切る	57
7	割り切る	47
8	押し切る	38
9	仕切る	36
	こむ（5631＊176）	
1	持ち込む	310
2	巻き込む	288
3	組み込む	261
4	追い込む	205
5	盛り込む	204
6	見込む	201
7	取り込む	184
8	思い込む	180
9	落ち込む	166
10	入り込む	162
11	飛び込む	148
12	突っ込む	114
13	書き込む	111
14	乗り込む	109

15	踏み込む	104
16	飲み込む	88
17	送り込む	85
18	打ち込む	83
19	申し込む	74
20	抱え込む	72
21	織り込む	65
22	流れ込む	62
23	吸い込む	59
24	教え込む	57
25	注ぎ込む	55
26	吹き込む	52
27	絞り込む	50
28	引き込む	50
29	割り込む	49
30	つぎ込む	48
31	押さえ込む	47
32	投げ込む	47
33	詰め込む	46
34	溶け込む	46
35	覗き込む	45
36	埋め込む	44
37	差し込む	43
38	運び込む	43
39	考え込む	41
40	逃げ込む	39
41	売り込む	38
42	押し込む	38
43	染み込む	38
44	駆け込む	35
45	溜め込む	34
46	包み込む	34
47	潜り込む	34
48	振り込む	33
49	放り込む	33
50	座り込む	32
51	決め込む	30
52	刷り込む	30
53	紛れ込む	30
54	呼び込む	30

	こめる（361＊40）	
1	閉じ込める	85
2	見込める	56
3	封じ込める	44
	だす（7026＊280）	
1	生み出す	973
2	作り出す	661
3	思い出す	572
4	引き出す	338
5	打ち出す	297
6	取り出す	208
7	持ち出す	205
8	飛び出す	186
9	言い出す	183
10	乗り出す	145
11	動き出す	136
12	差し出す	127
13	送り出す	111
14	追い出す	102
15	導き出す	103
16	逃げ出す	90
17	踏み出す	88
18	呼び出す	81
19	押し出す	78
20	抜け出す	78
21	考え出す	77
22	映し出す	75
23	見付け出す	70
24	吐き出す	66
25	捜し出す	61
26	描き出す	59
27	振り出す	56
28	書き出す	52
29	売り出す	50
30	切り出す	49
31	泣き出す	49
32	投げ出す	48
33	繰り出す	47
34	貸し出す	46
35	走り出す	45
36	突き出す	43

37	吹き出す	43
38	開き出す	42
39	放り出す	40
40	編み出す	38
41	締め出す	38
42	醸し出す	33
43	引っ張り出す	33
44	さらけ出す	31
	たつ（751＊25）	
1	成り立つ	523
2	飛び立つ	43
3	思い立つ	40
	たてる（1077＊42）	
1	申し立てる	197
2	組み立てる	139
3	積み立てる	81
4	役立てる	77
5	打ち立てる	70
6	取り立てる	69
7	掻き立てる	67
8	見立てる	52
9	駆り立てる	51
10	仕立てる	50
	つく（1953＊61）	
1	結び付く	589
2	落ち着く	326
3	追い付く	135
4	辿り着く	115
5	思い付く	110
6	行き着く	76
7	しがみ付く	57
8	くっ付く	48
9	住み着く	37
10	染み付く	33
11	張り付く	33
12	凍り付く	30
	つける（3056＊94）	
1	見付ける	646
2	結び付ける	334
3	押し付ける	260
4	引き付ける	146

5	取り付ける	144
6	突き付ける	125
7	受け付ける	117
8	駆け付ける	99
9	決め付ける	79
10	植え付ける	72
11	張り付ける	57
12	押さえ付ける	54
13	縛り付ける	51
14	投げ付ける	50
15	見せ付ける	49
16	貸し付ける	46
17	漕ぎ着ける	40
18	売り付ける	33
	でる（555＊38）	
1	申し出る	138
2	届け出る	119
3	にじみ出る	37
	とおす（120＊27）	
1	見通す	46
	なおす（961＊113）	
1	見直す	377
2	考え直す	72
3	遣り直す	61
4	立て直す	55
5	捉え直す	36
	なおる（101＊5）	
1	立ち直る	56
2	開き直る	31
	ぬく（409＊39）	
1	見抜く	116
2	生き抜く	49
3	引き抜く	32
4	勝ち抜く	31
	まくる（100＊49）	
	（追いまくる）	8

＊（　）内は参考

表 6　22 後項動詞による使用頻度 30 回以上の複合動詞（自然科学ジャンル〈含技術・工学〉改訂版 2013）

	あう（1905＊237）			あわせる（1276＊43）		5	煮込む	146		だす（4683＊217）		4	思い立つ	31	14	締め付ける	43
1	出会う	305	1	組み合わせる	402	6	差し込む	144	1	取り出す	562		たつ（665＊21）		15	決め付ける	36
2	付き合う	159	2	混ぜ合わせる	363	7	書き込む	133	2	作り出す	455	1	成り立つ	352		でる（386＊38）	
3	話し合う	133	3	問い合わせる	66	8	巻き込む	118	3	生み出す	396	2	煮立つ	129	1	届け出る	49
4	見合う	73	4	縫い合わせる	63	9	飛び込む	116	4	思い出す	351	3	飛び立つ	35	2	申し出る	48
5	似合う	69	5	炒め合わせる	45	10	落ち込む	108	5	引き出す	268	4	思い立つ	31	3	流れ出る	45
6	向き合う	67	6	重ね合わせる	37	11	染み込む	106	6	飛び出す	124		たてる（560＊38）		4	にじみ出る	31
7	絡み合う	58		いる（125＊25）		12	思い込む	103	7	送り出す	111	1	組み立てる	137		とおす（53＊13）	
8	重なり合う	55	1	立ち入る	33	13	吸い込む	103	8	吐き出す	89	2	煮立てる	93		（見通す）	21
9	知り合う	43		いれる（1216＊52）		14	流れ込む	95	9	呼び出す	86	3	見立てる	49		なおす（572＊128）	
10	立ち会う	43	1	受け入れる	380	15	埋め込む	89	10	押し出す	80	4	仕立てる	41	1	見直す	176
11	向かい合う	37	2	取り入れる	365	16	飲み込む	83	11	打ち出す	76	5	埋め立てる	38	2	遣り直す	49
12	触れ合う	34	3	流し入れる	87	17	送り込む	78	12	溶け出す	68	6	引き立てる	37		なおる（38＊4）	
13	噛み合う	31	4	仕入れる	39	18	読み込む	75	13	乗り出す	67		つく（1385＊55）			（立ち直る）	21
14	釣り合う	30		かかる（272＊35）		19	漬（付）け込む	73	14	持ち出す	65	1	落ち着く	240		ぬく（224＊28）	
	あがる（1249＊57）		1	取り掛かる	62	20	打ち込む	63	15	言い出す	63	2	結び付く	233	1	くり抜く	56
1	出来上がる	280	2	引っ掛かる	59	21	盛り込む	62	16	突き出す	63	3	くっ付く	123	2	引き抜く	56
2	立ち上がる	149		かける（1321＊94）		22	突っ込む	60	17	考え出す	59	4	辿り着く	92		まくる（58＊38）	
3	仕上がる	114	1	出掛ける	318	23	見込む	60	18	切り出す	55	5	思い付く	91		（追いまくる）	4
4	盛り上がる	83	2	見掛ける	159	24	押し込む	58	19	見付け出す	55	6	住み着く	58			
5	召し上がる	61	3	振り掛ける	124	25	追い込む	56	20	動き出す	51	7	行き着く	53			
6	炊き上がる	59	4	働き掛ける	94	26	溶け込む	55	21	醸し出す	48	8	取り付く	50			
7	浮かび上がる	47	5	話し掛ける	91	27	踏み込む	52	22	抜け出す	48	9	追い付く	40			
8	焼き上がる	46	6	追い掛ける	57	28	し込む	51	23	捜し出す	47	10	こびり付く	34			
9	浮き上がる	42	7	呼び掛ける	56	29	絞り込む	47	24	踏み出す	47	11	張り付く	33			
10	打ち上がる	31	8	投げ掛ける	42	30	刷り込む	47	25	食み出す	46	12	考え付く	32			
11	持ち上がる	31	9	仕掛ける	38	31	乗り込む	46	26	追い出す	45		つける（2550＊94）				
	あげる（2238＊103）		10	引っ掛ける	36	32	吹き込む	46	27	逃げ出す	41	1	見付ける	544			
1	取り上げる	417	11	語り掛ける	31	33	包み込む	45	28	絞り出す	39	2	取り付ける	413			
2	仕上げる	245		きる（613＊102）		34	詰め込む	45	29	導き出す	39	3	結び付ける	143			
3	作り上げる	183	1	使い切る	57	35	流し込む	44	30	吹き出す	38	4	張り付ける	139			
4	引き上げる	156	2	仕切る	55	36	引き込む	35	31	差し出す	37	5	盛り付ける	131			
5	持ち上げる	153	3	乗り切る	52	37	抱え込む	34	32	流れ出す	37	6	巻き付ける	88			
6	申し上げる	105	4	踏み切る	43	38	潜り込む	33	33	読み出す	33	7	押し付ける	86			
7	積み上げる	73	5	断ち切る	35	39	覗き込む	32	34	映し出す	31	8	受け付ける	60			
8	押し上げる	66		こむ（4526＊179）		40	運び込む	32	35	描き出す	31	9	引き付ける	60			
9	たち上げる	65	1	取り込む	297		こめる（189＊34）			たつ（665＊21）		10	くっ付ける	53			
10	打ち上げる	64	2	組み込む	225	1	閉じ込める	62	1	成り立つ	352	11	縫い付ける	53			
11	見上げる	63	3	入り込む	188				2	煮立つ	129	12	駆け付ける	47			
12	吊り上げる	32	4	持ち込む	152				3	飛び立つ	35	13	ぶつける	45			

＊（　）内は参考

表 7　22 後項動詞の使用頻度上位語が全体に占める割合【社会科学】

	後項動詞	延べ語数	異なり語数	語数	A 割合	語数	B 割合
1	だす	7026	280	4	36%	8	49%
2	こむ	5631	176	4	19%	8	33%
3	あう	3839	355	4	37%	8	49%
4	あげる	3499	108	4	58%	8	68%
5	つける	3056	94	4	45%	8	61%
6	かける	2304	100	4	49%	8	72%
7	いれる	2145	37	4	75%	8	88%
8	つく	1953	61	4	60%	8	75%
9	あがる	1271	57	4	59%	8	72%
10	たてる	1077	42	4	46%	8	70%
11	きる	1003	120	4	36%	8	57%
12	なおす	961	113	2	47%	4	59%
13	たつ	751	25	2	75%	4	83%
14	あわせる	719	50	2	39%	4	55%
15	でる	555	38	2	46%	4	57%
16	かかる	500	46	2	38%	4	58%
17	ぬく	409	39	2	40%	4	56%
18	こめる	361	40	2	39%	4	58%
19	いる	239	22	2	49%	4	64%
20	とおす	120	27	2	58%	4	71%
21	なおる	101	5	2	86%	4	99%
22	まくる	100	49	2	16%	4	32%

注：A 使用割合は上位 2 語と 4 語の場合で B 使用割合は上位 4 語と 8 語の場合である。

表 8　22 後項動詞の使用頻度上位語が全体に占める割合（自然科学：含技術・工学）改訂版

	後項動詞	延べ語数	異なり語数	語数	A 使用割合	語数	B 使用割合
1	だす	4683	217	4	38%	8	50%
2	こむ	4526	179	4	19%	8	31%
3	つける	2550	94	4	49%	8	63%
4	あげる	2238	103	4	45%	8	62%
5	あう	1905	237	4	35%	8	48%
6	つく	1385	55	4	50%	8	68%
7	かける	1321	94	4	53%	8	71%
8	あわせる	1276	43	4	70%	8	80%
9	あがる	1249	57	4	50%	8	67%
10	いれる	1216	52	4	72%	8	79%
11	たつ	665	21	2	72%	4	82%
12	きる	613	102	2	18%	4	34%
13	なおす	572	128	2	39%	4	49%
14	たてる	560	38	2	41%	4	57%
15	でる	386	38	2	25%	4	45%
16	かかる	272	35	2	44%	4	61%
17	ぬく	224	28	2	50%	4	67%
18	こめる	189	34	2	41%	4	53%
19	いる	125	25	2	38%	4	54%
20	まくる	58	38	2	13%	4	24%
21	とおす	53	13	2	57%	4	79%
22	なおる	38	4	2	87%	4	100%

注：A 使用割合は上位 2 語と 4 語の場合で B 使用割合は上位 4 語と 8 語の場合である。

該後項動詞全体の中でどのぐらいの割合を占めているか，自然科学系ジャンル（含技術・工学）の調査時と同様の方法で見てみよう。

各後項動詞によって構成される複合動詞はその総数が異なるため，延べ語数が 1000 語以上のものは上位 4 語の場合と 8 語の場合，1000 語未満のものは上位 2 語の場合と 4 語の場合についてそれぞれ全体数における使用割合を調べた。その結果を表 7 に示す。なお，自然科学系ジャンル（含技術・工学）の改訂調査結果も表 8 に揚げる。

表 7 からわかるように，上位 2 語あるいは 4 語という非常に限られた数の語だけで使用割合が全体の約 50％あるいはそれ以上の後項動詞が 22 語中 9 語（「あげる」「かける」「いれる」「つく」「あがる」「たつ」「いる」「とおす」「なおる」）である。範囲を上位 4 語あるいは 8 語まで広げれば，22 語中 20 語（49％の「だす」「あう」も含める）に上り，後項動詞全体の約 9 割を超える。残りの 2 語は「こむ」と「まくる」であるが，上位語の全体に占める割合が低いことから，これらの語を後項動詞とする複合動詞は相対的に使用頻度がばらけていることがわかる。この結果を自然科学系ジャンル（含技術・工学）改訂版の表 8 と比べると，上位 2 語あるいは 4 語という非常に限られた数の語だけで使用割合が全体の約 50％あるいはそれ以上を占めている後項動詞は，22 語中 10 語（「つける」「かける」「いれる」「つく」「あがる」「たつ」「あわせる」「ぬく」「とおす」「なおる」）で，社会科学ジャンルとは 7 語が重複している。範囲を上位 4 語あるいは 8 語まで広げれば，22 語中 18 語（49％「なおす」，48％の「あう」も含める）に上り，後項動詞全体の約 9 割となる。社会科学ジャンルと同様，相対的にばらけているのは「こむ」と「まくる」で，続いて「きる」と「でる」である。

以上のことから，社会科学，自然科学系（含技術・工学）両ジャンルともに，22 の後項動詞からなる複合動詞を見た場合，延べ語数が数万語と多くても，無数の異なる複合動詞が用いられているのではなく，ある程度限られた数の複合動詞が繰り返し用いられていることがわかる。例えば，

異なり語数が特に多い 3 語「あう」「だす」「こむ」を見てみよう。社会科学と自然科学系（含技術・工学）の両ジャンルで上位語 4 語と 8 語が全体に占める割合が非常に近い数字となっていることに気づく。

そこで，両ジャンルの上位 8 語について，社会科学ジャンルの上位語を基準に見てみる。その結果を表 9 に示す。「あう」は 8 語中上位 5 語が重複し，「だす」も上位 6 位までで 5 語が重複，「こむ」も半数の 4 語が重複している。この事実は，専門日本語教育における複合動詞の効率的な教育の観点からは重要な意味を持ち，複合動詞の導入の際に優先順位がつけられるという可能性を示している。つまり，22 の後項動詞から成る複合動詞について，両ジャンルともに高頻度で共通する 14 語（「出会う」「話し合う」「付き合う」「向き合う」「見合う」「生み出す」「作り出す」「思い出す」「引き出す」「取り出す」「持ち込む」「巻き込む」「組み込む」「取り込む」）は，教育上，最優先の複合動詞と位置付けることができるということである。一方，両ジャンルにおいて高頻度ながら共通していない複合動詞群が存在していることから，それらが各々のジャンルを特徴づけている可能性も推測される。

表 9　社会科学ジャンルと自然科学系ジャンルの上位語の比較

	社会科学		自然科学系		社会科学		自然科学系		社会科学		自然科学系	
	あう（355）		あう（237）		だす（280）		だす（217）		こむ（176）		こむ（179）	
1	出会う	466	出会う	305	生み出す	973	取り出す	562	持ち込む	310	取り込む	297
2	話し合う	458	付き合う	159	作り出す	661	作り出す	455	巻き込む	288	組み込む	225
3	付き合う	290	話し合う	133	思い出す	572	生み出す	396	組み込む	261	入り込む	188
4	向き合う	196	見合う	73	引き出す	338	思い出す	351	追い込む	205	持ち込む	152
5	見合う	187	似合う	69	打ち出す	297	引き出す	268	盛り込む	204	煮込む	146
6	知り合う	111	向き合う	67	取り出す	208	飛び出す	124	見込む	201	差し込む	144
7	立ち会う	80	絡み合う	58	持ち出す	205	送り出す	111	取り込む	184	書き込む	133
8	語り合う	78	重なり合う	55	飛び出す	186	吐き出す	89	思い込む	180	巻き込む	118

＊網掛けが重複語を示す。

5–2　個別結果―上位 2 つの後項動詞「だす」「こむ」について―

本節では，紙幅の都合により，延べ語数が圧倒的に多い上位 2 つの後項

動詞「だす」「こむ」から成る複合動詞について，日本語教育の観点から具体的に見ていきたい。意味特徴については，前回調査同様，基本的に姫野（1999）の分類に依拠して考察する。

5-2-1　だす

本調査では，自然科学系（含技術・工学）ジャンルにおける調査と同様，22 後項動詞中使用頻度 1 位は「だす」であった。延べ語数は最多の 7026 語，上位 4 語と 8 語の比率もほぼ同等で，使用頻度上位 8 語のみで全体の約 50％を占めている。最上位は 973 語の「生み出す」で，次に 661 語の「作り出す」，572 語の「思い出す」と続く。頻度が約半減して 338 語の「引き出す」，297 語の「打ち出す」，208 語の「取り出す」，205 語の「持ち出す」，186 語の「飛び出す」の順である。ちなみに 9 位は「飛び出す」と僅差で，183 語の「言い出す」である。

意味特徴として，「引き出す」「打ち出す」「取り出す」「持ち出す」は前項動詞の修飾関係から外部への移動の方法を表している。「生み出す」「作り出す」「思い出す」は顕在化するという意味で，「生み出す」「作り出す」が創出[6)]を，「思い出す」は顕現[7)]を表している。「飛び出す」のみ自動詞として働く。自然科学系（含技術・工学）ジャンルと比較すると，上位 5 語中 4 語（「生み出す」「作り出す」「思い出す」「引き出す」）が重複している。重複していない語「打ち出す」も 11 位で高頻度語である。6 位から 8 位の「取り出す」「持ち出す」「飛び出す」も自然科学系（含技術・工学）ジャンルでは各々 1 位，14 位，6 位というように順位は異なるものの，総じて上位語は重複していることがわかる。また，上位 8 語の用例を見ていくと，ほとんどが語彙的複合動詞であり，明確に統語的複合動詞に数えられるものは「持ち出す」に 1 例（「時事用語に興味を持ち出した（＝持ち始めた）僕は」）あったのみである。なお，上位 8 語には入らないが，9 位の「言い出す」については，姫野（1999）も指摘するように，実際に「だす」が「外部への移動」か，「動きの開始」か区別がつきかねる中間的な性質を持つも

のが多く，例えば，「彼がなぜそんなことを言い出したのか」「子供達がそれなら自分にもできると言い出した」というように，語彙的複合動詞とも統語的複合動詞とも理解でき，判断がつきかねる例が多くあった[8)]。

次に名詞との結びつきを見てみたい。ただし，ここでは結びつく名詞の範囲が広いと考えられる「思い出す」は除くことにする。接続する名詞を概観すると，自然科学系（含技術・工学）ジャンルとは異なる社会科学ジャンルの傾向が読み取れる。具体例として以下にその一部を挙げる。

- 生み出す：価値，問題，利益，効果，売上，雇用，失業，所得，資産，独占，供給過剰，富，付加価値，関係，労働，ニューエコノミー，ヒット商品，必要性，差別，イデオロギー，軍国主義，発想，危機，リスク，飢餓，環境破壊，民族的対立，国際的な連合体，風潮，活力，職業的官僚群，恐怖，暴力，不安定，無関心など
- 作り出す：条件，産業構造，需要，商品，資産，資源，利潤，利益，競争，市場，階級，関係，経済成長，敵，危機，社会，生産力，計画，状況，状態，雰囲気，システム，体制，仕組み，問題，空間，局面，要因など
- 引き出す：やる気，自主性，本音，意欲，活力，自供，個性，能力，才能，長所，価値，共感，力，条件，論拠，教訓，理解，結論，譲歩，資金，お金，預金，全額，融資，支出，利益，割引価格，うま味，甘味など
- 打ち出す：対策，政策，方策，見解，方向，目標，指針，方針，構想，考え方，展望，姿勢など
- 取り出す：財布，携帯電話，タバコ，薬，本，写真，ハサミ，拳銃，包丁，ウラン 235，内臓，腎臓，情報，データ，事例，類似点，特徴，抽象的な概念，記憶，要素など
- 持ち出す：鍵，お金，金銭，印鑑，包丁，ことわざ，問題，論法，大義名分，別れ話，離婚話，預金証書，企業の機密，概念，提言，提案，条件，人事権，四島返還論，日本悪者論など
- 飛び出す：生徒，監督，群衆，本，発言，話，質問，意見，不満，目，日本論，料理，各論，映像など

「生み出す」「作り出す」と結びつく名詞は，具体的レベルから抽象的レベルまで様々であるが，「資産，雇用」など社会科学分野でよく用いられる名詞が多いことがわかる。「打ち出す」も結びつく名詞に傾向があり，その多くが「対策，政策，方針，構想」などである。これらの名詞と結びつく

「打ち出す」は，「発表する，はっきり示す」という意味を表し，具体的に「打つ」という動作の意味を持たないことに注意が必要である。「引き出す」は，「預金／お金／全額を引き出す」など具体的な名詞と結びつく場合の用法はイメージしやすいと言えるが，「やる気／自供／譲歩／うま味を引き出す」というように抽象名詞と結びつく連語表現については，ある程度，数がまとまった段階で，名詞と動詞の結びつきの確認が必要であろう。

「持ち出す」についても，具体的な名詞と結びつく用法，例えば「彼はお金／包丁／印鑑を持ち出した」という例では否定的な意味を想像させるのはさほど難しくないと思われる。しかし，「持ち出す」という動詞が，単に対象物を持って出す，あるいは持って出るという意味で使われるのではなく，「米を秘かに持ち出す」「なりふりかまわず四島返還論を持ち出す」というように，意外性や驚きを意味する副詞，例えば「秘かに／こっそりと／黙って／突然／簡単に」などとともに用いられ，否定的な意味を表すことについては説明が必要だと考えられる。さらに，「（場所）に／で～が持ち出される」という受身形で抽象名詞と一緒に用いられる用法も多く見られる。例えば「法廷に離婚請求が持ち出される」，「軍に関する背景説明では上官殺しの問題が持ち出された」，「地球環境サミットで持ち出された提言」「正当化するためにそうした概念が持ち出され」というような表現では，具体的に「持つ」という意味はなく，外部に「出す」ためにそれなりの力や抵抗がかかるという語感を持つことを説明する必要があろう。

「飛び出す」は大半が「（人）が飛び出す」意味で使われていたが，それ以外で目を引いたのは「発言，意見，悩み話，各論の話，言葉，思い出話，不平不満，質問」などの話の内容を表す語との結びつきで，「次々と，矢継ぎ早に，いきなり，ぽんぽん」などの副詞と一緒に用いられていた。また，「飛び出す」と僅差の上位 9 位の「言い出す」は，ほとんどが助詞「と」によって発話内容が引用されていたが，「を」格と結びついた名詞には「離婚，別れ，唐突なこと，馬鹿げたこと，ばかなこと，一人前の事，消極

論，緊急勅令」など，驚きや否定的な意味を表す名詞があり，副詞は「突然，急に，途中から，真顔で」などと結びついていた。

5-2-2　こむ

「だす」の次に使用頻度が高い後項動詞は「こむ」である。表 5 を見るとわかるように，「こむ」を後項動詞とする複合動詞は「だす」とは傾向が異なる。これは自然科学系ジャンル（含技術・工学）の調査の場合と同様である。本調査で延べ語数 5631 語中，使用頻度が 300 語を超す語は 1 語のみで，200 語台が 5 語，100 語台が 9 語で，それ以下は徐々に頻度が落ちていき，個々の複合動詞の頻度は相対的にばらけている。実際に使用割合が 50％を超えるのは上位 16 番目で，その 16 語は以下の通りである。

> 持ち込む，巻き込む，組み込む，追い込む，盛り込む，見込む，取り込む，思い込む，落ち込む，入り込む，飛び込む，突っ込む，書き込む，乗り込む，踏み込む，飲み込む

ここで自然科学系ジャンル（含技術・工学）の調査の場合の 17 語と比較してみよう。

> 取り込む，組み込む，入り込む，持ち込む，差し込む，煮込む，書き込む，巻き込む，飛び込む，落ち込む，吸い込む，染み込む，思い込む，流れ込む，埋め込む，飲み込む，読み込む，送り込む

先に述べたように，社会科学ジャンルと共通する高頻度語の上位には「持ち込む」「巻き込む」「組み込む」「取り込む」の 4 語がある。さらに見ていくと，共通する語には，「思い込む」「落ち込む」「入り込む」「飛び込む」「書き込む」「飲み込む」の 6 語があり，16 語中 10 語が共通している。これら 10 語は両ジャンルに共通する高頻度語と言えよう。姫野（1999）は，「こむ」の意味特徴を，「内部移動」（主体あるいは対象がある領域の中へ移動すること）と「程度進行」（動作・作用の程度が進行すること）の二つに分け，前者が全体の約 8 割を占めると述べている。上に挙げた社会科学ジャンルの 16 語中，「程度進行」の意味を持つのは「思い込む」の 1 語であった。このほか，「書き込む」も「程度進行」の意味で用いられる可能性を有している

が，本調査では「書き込む」はすべて「書類に必要事項を書き込む」のような「内部移動：対象の移動」の用法で「累積化」の用法はなかった[9)]。

頻度の高い16語について具体的に見ていきたい。まず圧倒的に頻度が高いのは「持ち込む」である。他動詞で「内部の閉じた空間への移動」を表す。「整備工場に車を持ち込む」「審査会場に商品を持ち込み」「日本に犬や猫を持ち込む」というように，ある境界によって生じる領域に具体的なものを持ち込む場合，あるいは「若者言葉をビジネスの現場に持ち込まない」「政治に宗教を持ち込まないこと」「東西対立を冷戦に持ち込む」「利用者が苦情を持ち込む窓口が必要だ」「法人税に所得分類を持ち込んだ」というように，ある領域に抽象的なものを持ち込む場合がある。さらに，「妹に縁談が持ち込まれる」「全離婚件数のわずか一パーセントが，一般の法廷に持ち込まれる」「人口の大多数の諸利害が政治的決定過程に持ち込まれる」「施設ケア研究に分業の視点が明確に持ち込まれた」というように受身形で使われている用例も多く，延べ310例中94例というように用例全体の約三分の一に上っていた。前回の自然科学系ジャンル調査の際にも触れたが，抽象名詞と結びつく用例は，日本語学習者にとってイメージがつかみにくいと考えられ，様々な用例を通じた説明が必要であろう。

使用頻度2位は「巻き込む」で他動詞である。姫野（1999）は，「巻き込む」は対象自体の移動は問題にされず，枠組みそのものが動き，結果的に対象を内部にとりこんだ領域を形成すると述べている。全用例288例中169例が受身形の用法で，「母親が子どもの問題に巻き込まれ」「両親の離婚に子供たちの非常に多くが巻き込まれる」「日本が核戦争に巻き込まれる」「親戚の農家が土地売買の詐欺事件に巻き込まれ」「福田は三角大福の泥沼抗争に巻き込まれ」「警官隊との衝突に巻き込まれて彼が怪我でもしたら」「経済強者はリストラの嵐に巻き込まれることもない」「普通の市民が裁判に巻き込まれた時」「隊員が不測の事故に巻き込まれ」というようにほとんどが否定的な意味で用いられていた。しかし，能動形の用例の場合

は，受身形の場合と異なり，「高齢者は若い世代をも巻き込み，勇気を持って生き生きとして人生を楽しみ」「民間が行政を巻き込む形で行っていく必要がある」「地域のグループを活動に巻き込む」「意識はあらゆる感覚を巻き込む共同的な作用なのである」「母親だけでなく，父親をも巻き込んだ父母会活動にしていく」というように，「意志を持って対象を内部に取り込む」と理解され，否定的な意味は感じられない。また，上記用例からもわかるように，導入時に形として「（対象）を（内部）に巻き込む」と導入しても，能動形の場合は用例に格助詞「に」が明示されていない場合も多く，それを補って理解する必要がある。一方，受身の場合は，「（対象）が（内部）に巻き込まれる」の形で用いられるので，能動形の場合より助詞との組み合わせは理解しやすいであろう。

3 位は「組み込む」で，「間隙のある集合体または組織体の中への移動」を表す他動詞として用いられる。「ハンガリーはがっちりとソ連圏に組み込まれている」「同氏が全社的体制に組み込まれたこと」「タイは世界市場に組み込まれた」「選挙運動の一部に B 支店が組み込まれて」「アイヌの社会が和人の法制度の下に組み込まれたとき」「老年文化が商業文化に組み込まれて行く」「経済摩擦が日米間に構造的に組み込まれ」というように，261 例中半数以上となる 147 例が受身で用いられていた。形は「（対象）を（内部）に組み込む」であり，能動形の用例には，「中国は国内経済を国際経済システムに組み込むために」「投資信託は相場商品を組み込むので」「いかに CO_2 削減を戦略に組み込むことができるのか」「学習を生活に組み込む」「自国通貨を ECU 通貨バスケットに組み込む」「企業も経営戦略に企業文化の確立や革新を組み込む」「修理費を予め年間予算に組み込んでおく」「多国籍企業の行動や直接投資の理論を組み込んだ汚染逃避地仮説のモデル」などがあった。

4 位は「追い込む」で，「対象の閉じた空間への移動」を意味する。205 例中半数以上に当たる 134 例が受身で，例えば「内閣は翌年の参院選で惨

敗を喫して解散に追い込まれた」「多くの原発が停止に追い込まれ」「個人経営の喫茶店が閉店に追い込まれ」「日本経済は危機的状況に追い込まれ」「鹿川君の両親が自殺に追い込まれた」「労働者は常に失業という貧困の極限に追い込まれる可能性を持っている」というように切羽詰まった状態を対象側の視点で表し，特に経済的状況に関する話題によく用いられていた。能動形では，「元首たちは世界を第二次世界大戦に追い込み」「銀行側が甘言を弄して個人を不動産投資の巨大ローンの闇に追い込んで」「同社を倒産までに追い込んだ金額の大きさ」というように追い込んだ主体に焦点が当たっている。

5 位は「盛り込む」で，同じく「対象の閉じた空間への移動」を意味する。「盛り込む」では受身の用例は 204 例中 85 例で半数以下であった。「内閣提出法案に野党の主張が盛り込まれ」「予算にすべての政府活動が盛り込まれ」などの受身の用法のほか，「社会・労働政策を条約に盛り込み」「育児休業法の中に介護休業の権利を盛り込む改正案」「個人情報法で新たな罰則を盛り込む必要はない」「唱歌を指導課程に盛り込む」「秘密保持規定を就業規則に盛り込む」「スイス風演出を盛り込んだ結婚式」「教材に修身的な題材を盛り込んだ」「雇用通知書に労働条件内容を盛り込んでおく」「加工品の写真を豊富に盛り込んだ充実したウェッブページ」というように用いられていた。能動形の表現を詳しく見ると，既成の法や規則，施策に対して更に「盛る」，つまり主体が積極的に何かを付加していくという意味で用いられることが多かった。このように意図や意思を明確にする場面で使われることが多いため，能動形の用法が多いのではないかと考えられる。

6 位は「見込む」である。姫野（1999）は「見込む」を「内部移動」の意味の中でも「その他」に分類し，格助詞「に」を取らず，潜在的な枠組みが設定できると述べている。201 例中，その約四分の三に当たる 146 例が受身で用いられ，「増大，急増，上昇，改善，進展，低下，減少，悪化，拡大，成長，需要，値上がり，黒字，収入，発生，影響」などが副詞「確実

に／あらかじめ」とともに「見込まれ」ている。この「見込まれる」の意味は「予想される」と置き換えられる。また能動形では，「部品メーカーは先々の製品販売数を見込んだ上で」「運転資本の増額を見込んだとしても」「ある程度の貸し倒れを見込んで貸出を行う」「時間の浪費をかなり見込んで」「相場が落ち着くのを見込んで指値注文を入れるか」というように，「見込む」は「考え／考慮の中に入れる」と置き換えられるが，「英訳に一週間かかる，とみこんだからである」「本年度の収入，すなわち，財源をどのように見込むか」というような例では，「見込む」は「考え／考慮の中に入れる」には置き換えられず，「予想する」に置き換えられ，上記の「見込まれる＝予想される」に対応した用法になっていると言えよう。さらに「見込む」は，対象が人の場合にはその意味が「（対象者を）有能／有望だと評価して／予想して」の意味となる。例としては，「経営者がこれと見込んだ人材に」「松下幸之助さんを見込んで融資したケース」「大業は，スサノオが見込んだ後継者オオクニヌシに引き継がれた」などがある。頻度は低いが，他の用法とは意味が異なるので，注意が必要である。

7 位には自然科学系ジャンル（含技術・工学）で 1 位の「取り込む」が来る。「取り込む」も「対象の移動」を表す他動詞として用いられる。なお，全 184 例中受身用法は四分の一弱に当たる 39 例であった。受身の用例として，「ボヘミアはチェク人が神聖ローマ帝国にとりこまれていただけに」「商品ならざる商品が市場システムに取り込まれてゆく」「グル―バルな競争に取り込まれた都市」「生活の中に取り込まれている美術作品」「ハイテク詐術とドットコム信者に取り込まれた人々」「理性は非理性に取り込まれる」「このジャガイモ，ニンジン，タマネギが，いかにカレーに取り込まれたか」などがあった。この「取り込まれる」は，内部に移動し一体化あるいは同化するというように理解できる。能動形の用例としては，「与党を内閣に取り込む」「光を体に取り込む」「より確実に神の霊威を体内に取り込み」「制度的場に生き方の論理，倫理，美意識を取り込み」「このよ

うな薬物を，長い年月自分のからだに取りこむことへの不安」「情報概念を社会科学の中に取り込む上で」というように，「～を～に取り組む」の形で対象と取り込む場所が明示される。しかし，取り込む場所が自明の場合には，「観光客を取り込むため」「本人が過剰に相手の規範を取り込むとき」「より健全な信念を取り込むことができた」「顧客のニーズをどう取り込むか」「効率よく酸素を取り込むため」というように取り込む場所が明示されない場合も多いので，それを補って理解する必要がある。8 位から 11 位までは主体の移動を表す自動詞が続く。

8 位は「思い込む」で，「自分が一番と思い込んでいる」「マスメディアが伝える内容をそのまま真実と思い込んで」「第一通報者を容疑者と思い込んで」というように「～を～と思い込む」の形で用いられ，ある考えの中に入ってしまい，そこから出られないという否定的な意味を表している。「勝手に／一方的に／単純に」などの副詞と一緒に用いられている。

9 位は「落ち込む」で，主体の閉じた空間への移動あるいは自己の内部への移動（主体あるいは対象の一部が基底部に向かって沈下する）の意味を持つ。社会科学ジャンルでは自然科学系ジャンルとは異なり，「人（私をはじめとする人）／気持ち／気分／気」などが「落ち込む」意でも用いられているが，圧倒的に多いのは経済関係の語彙との結びつきであった。「売上げ／需要／経済／競争力／業績／消費／生産量／景気／税収／設備投資／消費者のニーズ／収入／所得／利回り／利益率が落ち込む」というように用いられている。また，落ち込んだ先である落下点を「に」「まで」によって表し，「実質成長率はマイナスに落ち込み」「99 年度の 48 万戸からかなり落ち込み」「21％にまで落ち込み」「売り上げが前年の約 7 割に落ち込んだ」「日経平均株価はバブル崩壊後最安値まで落ち込んだ」というように数値関係の語で示す場合，あるいは「三反半の小作農に落ち込んだ」「アメリカもインフレに落ち込んだ」「日朝交渉は新たな膠着状態に落ち込んだ」というように状態を表す語で示す場合があった。さらに，人の精神活

動に関わる「落ち込む」の場合は，副詞は「急に／すっかり／がっくりと／ひどく／いささか／深く」などと結びつき，経済関係の語彙と結びつく場合には，「急激に／大幅に／大きく／相当に／どーんと／いったん／いっそう」などの副詞と結びついていた。

10 位は「入り込む」で，「閉じた空間への移動」としては，「入る」という前項動詞との結びつきによってイメージもしやすいと考えられる。具体例として，まず通常人が入れない，あるいは入ってはいけない空間に入るという意味で，「この壁から酔っ払いが入り込む」「ノックもせずに豪勢な重役室に入り込み」「当時のアメリカ政府にはソ連のスパイがだいぶ入り込んで」「大阪から地方へ行く人が時にずかずかと他人の家へ入り込む」などである。「入り込む」の否定的な印象は「ノックもせずに」「ずかずかと」などの副詞あるいは副詞句によってより鮮明になっている。このような具体的な閉鎖空間への移動が理解できれば，「（人が）妄想世界に入り込む」のような抽象的な閉鎖空間への移動の理解は難しくないであろう。そのほか，副詞，副詞句として「やすやすと／どうにかして／誰にも気づかれずに／どんどんと／奥へ奥へと」などが一緒に用いられていた。主体が無生物の場合の例では，「気管，肺に食べ物が入り込んで」「ワサビ田に泥が入り込む」「T 細胞の中にエイズウィルスが入り込んで」「上空に寒気が一気に入り込まなければ」「斑点は表面だけで内部に入り込まない」「私たちの生活の中にインターネットが深く入り込んでいます」「ロボットたちは社会のあらゆる片隅に入りこみ」などの具体的な主体の移動から，抽象的な主体への移動，例えば「電子情報の技術が暮らしの中に深く入り込んできて」「文化的価値がこの領域の政策形成プロセスに入り込む」「昇給や賞与の決定に私情が入り込む」につなげていくことが考えられる。

11 位は「飛び込む」である。人が主体の場合，「子供を助けようと湖に飛び込んだ男性」「毎朝六時にプールに飛び込んで練習した」「若者たちが海に飛び込み」「噴水の池に飛び込み，さわぎだす学生」「観客席に飛び込

む」のように，目的はさまざまで実際に勢いよく飛んで中に入る場合，「私は大急ぎで部屋に飛び込み，部屋をさっと掃除して」「洋食屋に飛び込み，寒さ凌ぎの腹ごしらえ」「土産物屋に飛び込んで買い物をしたり」「便所に飛び込み」「火中に飛び込む」のように，飛ぶように急いで，あるいは速く具体的な場所に入る場合がある。そこから，さらに抽象化された場所，例えば「ビジネスの世界／福祉の世界／新天地／子どもの世界／ヤクザ社会／今とは異なる生活環境／工業化社会／相手の懐」に，ある境界を越えて勢いよく入るということで，意志あるいは勇気を持って新たに入っていくと理解できる場合が多い。一方，具体的な場所を表していても意味が異なるのが次の例である。通常，人が飛び込まない場所，例えば「井戸」や「地下鉄／電車／列車」の場合で，自殺の方法を表す時に用いられているので，上記の例の最後に対比して導入すべきであろう。ちなみに「川／湖／海」などにもその可能性はあるので文脈からの判断となる。

次に主体が人ではない無生物の場合について少し触れる。自然科学系ジャンルの調査時と同様，「～が目／耳に飛び込む」の慣用表現が目を引いた。例えば「目に飛び込んでくるすべての景観が」「突然，どこかで聞いたメロディーが耳に飛び込んできた」「玄関を開けたとたん，子どもたちのたくさんの作品が目に飛び込んできた」「ノートを開いたとき，情報が目に飛び込んでくるかどうか」「音源から何にも邪魔されることなく耳に飛び込む直接音」というように，突然，見えたり聞こえたりする状況を，無生物を主体として表す方法である。このほか，「訪日が 1991 年 4 月に確定したというニュースが飛び込んできた」「マリーのもとに思いがけない知らせが飛び込んでくる」「刺激的な言葉が飛び込んできた」「緊迫した声が飛び込んできた」「ある日クレームが飛び込んだ」「誰も知らないような好条件が飛び込んできた」「ソビエト側の通告が佐藤大使の手をへて飛び込んできた」というような例があり，「目」や「耳」は特に表層表現には現れていないが，意味としては「見る」「聞く」ことにつながる内容であった。

12 位は「突っ込む」である。意味としては「中身の詰まった個体に，対象がその内部に侵入したり，表面に付着したりして，個体の形態に変化を及ぼす意」である。「突っ込む」は他動詞と自動詞の両方の形を持つ。他動詞としては，例えば「食べ物をポケットへ突っ込み」「左右の手の指 4 本ずつをそれぞれのイスの穴に突っ込みながら」「眼鏡はズボンのポケットに突っ込んでいた」「こたつに足を突っ込んで寝た」「洗濯物に首を突っ込み」「履き物に足を突っ込まずにはいられない」というように，ある抵抗感を越えて対象物を中に入れることを表している。次のような例では，「(人が)～に勢いよく突進する」という意味の自動詞として用いられている。「アメリカン航空 77 便が乗員，乗客 64 人もろとも，米国防総省に突っ込み」「敵陣に馬で突っ込む戦法」「簡単に死にたければ，車ごと水中に突っ込めば」というように大きな衝撃を伴う様子が伝わる。そのほか，「中に一層深く入る」という意味で独立して用いる場合があり，例として，「判事の突っ込んだ尋問」「私はさらに突っ込んだ継続研究を進めていきたい」「警察官を指揮して突っ込んだ捜査をさせたり」「断定を避ける背景には相手から突っ込まれない用心が働いている」などがあった。さらに慣用表現としては，「首」と結びつく例が多く，そのほか「口」「手」「顔」も共起する例があった。例えば，「政治に首を突っ込まざるを得ない」「中国との戦争に首を突っ込むことになった」「無謀な太平洋戦争に足を突っ込むことが」「ヘタに手を突っ込んだら米ソ直接対決に追いつめられない」「政治には顔を突っ込んではいけない分野があって」などである。しかし，これらの例を見ると，同じ内容でも「首」と「顔」，あるいは「首」と「足」が使われており，身体表現との結びつきは比較的緩い傾向にあるようである。なお，「突っ込む」は「突き込む」の音便形であるが，本調査では音便形の「突っ込む」が 114 例に対して，非音便形の「突き込む」は 1 例のみであった。それは「挿入された竹が胸部に届くほど深く突き込まれており」という文の中で用いられ，人が「竹を突き」，その「突かれた竹」が奥深く刺

さっていることを意味している。一方，上記「突っ込む」の多くの用例は，これまで見てきたように，「突く」という行為より，「中に入れる／入る」という行為に重点があり，「突っ込む」という語が抵抗感を越え，衝撃も伴う勢いで「中に入る」という意味を表し，「突っ」はすでに接頭辞の機能となっていると言えよう。

13 位は「書き込む」で，前述したように本調査では「内部移動：対象の移動」の用法のみで「累積化」の用法はなかった。例としては，「書類に必要事項を書き込む」「個人サイトに英語によるレポートを書き込まなければならない」「年末年始の行事の有様がぎっしり書き込まれたメモ」「自分の答えは問題集に書き込まずに」などがあり，副詞「ぎっしり／びっしりと／丁寧に／すべて／細かく」などと一緒に用いられていた。

14 位は「乗り込む」で，具体的な乗り物に乗る場合は，「そのタクシーに乗り込むことができた」「東北を目指して常磐線に乗り込み」「日本行きの飛行機に乗り込んだ」などの例があり，そのほか，「電車／満員電車／列車／船／フェリー／クルーズ船／密航船／ヘリ／エレベータ／パトカーの後部座席」などの閉じた空間への移動を表し，副詞「あわただしく／どやどやと／ばらばらに」などとともに用いられていた。もう一つの意味は，「障害があってもそれを越えてある場所に押しかけていく」という意味である。例として「東京・大手町の産経新聞へ乗りこんできた。どなりこんできたと書いたほうが正しいであろう」という文で説明されているように，「乗り込む」時の様子は「怒鳴り込む」というような状態だと言えよう。ほかの例としては，「A はその地区に乗り込み，数名を後援会員にすることに成功し」「その本場のアメリカに乗り込み，マーケティングでめしを食べて行こう」「勝手気ままに他社に乗り込むのは失礼千万なのです」「ダメ会社の大株主になった上で乗り込ませるのです。」「警察が捜査令状もなく，個々の家に乗り込んできた時」があった。この後者の例は，前者の例より少なかったが，乗り物になる場合とは異なり，否定的な意味を持

つ場合もあるので，導入時には注意が必要である。

15 位は「踏み込む」である。他動詞の用法としては，「パンチを打つときは利き腕と逆側の足を踏み込み」「左手を添へ右足をそのまま踏み込んで同様に倒す」「一般にアクセルを 70％以上踏み込むと急に黒煙や NOx が出てきます」というように，足に体重をかけ，ある領域の境界を越えて対象物を内部に入れるという意味を表す。実際には具体的に上記の意味を表す例は少なく，頻度が高いのは以下のような自動詞の例である。「指名犯人の居る室に踏み込む」「警察も簡単に個々の家庭に踏み込むことはできなくなる」「自分の内面へ土足で踏み込む」「夫婦以外の男女の密会なら現場に踏み込んで引致することができた」「国家が勝手に沖縄の人の生活に泥足で踏みこんできた」「こちらが望んでいない部分にズカズカと踏み込んでくると」「集団的自衛権まで踏み込むのか」というような例は，「ある領域を越えて侵入する」という否定的な意味を持つ。副詞，副詞句は「ずかずかと／土足で／泥足で」などが用いられている。そのほか，「ある領域を越えて更に奥深くに入る」という意味で用いられ，肯定的な意味を持つ場合が多い。「日本文化の深層に踏み込んだ鋭い洞察」「女性の生活や意識に踏み込んで分析し」「内閣法の見直しに踏み込んだ」「告訴がないと踏み込んだ捜査はできない」「さっそくその内容に踏み込んだ反論が用意された」「もう一歩踏み込んだ指導や上司への報告がなされなかった」などの例があった。副詞，副詞句は「一歩／もう一歩／さらに一歩／もう少し／かなり」などが用いられていた。

最後の 16 位は「飲み込む」で他動詞である。実際に「食物，水，煙」などを飲んで体内に入れるという意味の具体例は比較的少なく，同様の意味で用いられる擬人化用法が多かった。具体例としては，「船を飲み込むような大きな魚」「この地域を飲み込もうとするグローバル資本」「江戸は過剰人口を飲み込んで」「サービス産業が製造業から吐き出された労働者を飲み込んだ」「日本は中国に全部飲み込まれてしまう」「不安定な北カフカ

スがチェチェンの独立闘争に飲み込まれ」「そんな意見に飲み込まれるわけにはいかなかった」などがあった。そのほか，「次第に要領を飲み込んで」「観測者たちが事情を飲み込むまでは数分の遅延があった」「ロゴのことひとつ，呑み込むのにこの調子ではどうしようもない」というように「理解する，十分心得る」の意味で用いられる例と，「私は浮かんでくる気休めの言葉をすべて飲み込みました」「その言葉をのみ込んだ単身赴任の父親の話なんか身につまされる」というように，「言葉を飲み込む」という慣用的な用法で言外に抑制を表す例が 2 例あり，同様に抑制を表す意味で「怒りを飲み込んで謝罪を受け入れようと」「思ったことをすべて飲み込んでしまって何も言わないでいると」「妄想を飲み込んで」という例もあった。

以上，「こむ」を後項動詞とする複合動詞の延べ語数の約半数に当たる 2835 語，すなわち高頻度の上位 16 複合語について細かく見ることにより，指導上の問題のいくつかが明らかになったと考えられる。

6. おわりに

本研究では，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（書籍コーパス）の自然科学系ジャンル（自然科学と技術・工学）の文章を対象に，複合動詞の後項動詞となる 22 動詞を検索した結果，延べ語数 37620 語，異なり語数 1884 語の複合動詞が抽出され，その動詞としての用法について使用傾向を調べた。その結果，後項動詞「だす」「こむ」「つける」「あげる」「あう」によって構成される複合動詞の使用が全体の 6 割以上を占めていることがわかった。また，社会科学，自然科学系（含技術・工学）両ジャンルともに，22 の後項動詞からなる複合動詞を見た場合，ある程度限られた数の複合動詞が繰り返し用いられていて，しかも，両ジャンルともに高頻度で共通する複合動詞が 14 語あることがわかった。その 14 語とは「出会う」「付き合う」「話し合う」「見合う」「向き合う」「生み出す」「作り出す」「思い出す」

「引き出す」「取り出す」「持ち込む」「巻き込む」「組み込む」「取り込む」である。これらは教育上，優先的に位置付けることができると考えられる。

今後の課題としては，人文科学ジャンルの文章における後項動詞の使用傾向を調べ，本調査結果と合わせて実証分析につなげることである。また，本稿で紙幅の関係から取り上げることができなかった他の頻度の高い後項動詞から成る複合動詞についても，別の機会に考察を行いたい。

謝　　辞

本研究で用いたデータはコンピュータ処理による結果を用いていますが，本研究の目的に合わせてデータの加工を行う必要があり，漢字の用字，意味の確認は人手に依っています。今回はその確認作業を本センター講師の加藤奈津子氏にご協力いただきました。ここに記して謝意を表します。また，前回の調査時の第一段階のデータの使用をご許可くださった大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所准教授山崎誠氏にも感謝の意を表します。

注

1）　本調査では，紙幅の都合により，村田・山崎（2012）では調査対象とした，アスペクトを表す「始める」「続ける」「終わる」と過剰・過度を表す「すぎる」の 4 動詞を対象外とした。

2）　村田・山崎（2012）「4.1 複合動詞の抽出方法」p. 87 に詳しい。

3）　『大辞林』第三版三省堂，『言泉』第一版小学館。

4）　村田・山崎（2012）では，一部の複合動詞が可能形あるいは使役形として出現していたので，それを文脈から判断して元の動詞に戻して数えたが，本調査では出現形のまま数えることに変更した。その理由は，例えば後項動詞の「込む」は「込める」の形での出現形が多かったこともあり，日本語学習者にとって，やはり目にする形のままの頻度が重要ではないかと考えたことによる。

5）　前回の自然科学系ジャンルの調査結果と改訂版の異なる点は以下の 4 点である。①延べ語数で「つく」の語数が 110 語増えて「かける」と順位が逆転した。②延べ語数で「こめる」の語数が 83 語増えて「いる」と順位が逆転した。③異なり語数で「つける」の語数が 6 語増えて「かける」と同数になった。④異なり語数で「こめる」の語数が 25 語増えて順位が 21 位から 17 位になった。

6）　姫野（1999）によると，「創出」は人が何らかの手段で無の状態から対象を

生じせしめ，前項動詞はその方法を示し，創作活動，加工作業に関すものが主である。

7）　姫野（1999）によると，「顕現」は対象がもともとそこにあって，人の知覚に触れないでいたものが，変化が加わり，見えたり聞こえたりするようになって存在が明らかになることである。

8）　姫野（1999）「5.4 開始の「～だす」」p. 97。

9）　姫野（1999）「2.3 累積化」p. 72。

参考文献

斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究―語における形と意味―』ひつじ書房.

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.

村田　年（2008）「文章と複合動詞―論述文ジャンルを特徴づける新たな指標を探して―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 36 号，pp. 1-33.

山崎　誠（2009）「代表性を有する現代日本語書籍コーパスの構築」人口知能学会誌，24(5), pp.623-631.

村田　年・山崎　誠（2012）「自然科学系書籍における複合動詞の使用傾向―後項動詞を指標として―」『日本語と日本語教育』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター 40 号，pp. 83-112.

関連 URL

「中納言」　https://chunagon.ninjal.ac.jp/

「KOTONOHA 国立国語研究所言語コーパス整備計画」

http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/